

KUIS (Kansai University of International Studies) 発

みんなの特別支援教育

～ 授業のユニバーサルデザイン化をめざして～



Kansai University of
International
Studies

関西国際大学

兵庫県尼崎市教育委員会

CONTENTS

みんなの特別支援教育を目指して…………… 02

I 教師の子ども理解…………… 03

子ども理解のためのアセスメントとは

子どもの特性理解の視点

「困った子ども」から「困っている子ども」への視点の転換

II 人間関係の形成と学級経営の方策…………… 07

学級経営で大切なこと

人間関係づくりを学ぶ機会や場の設定

III 授業づくり…………… 15

授業のユニバーサルデザイン化をめざして

授業の展開における具体的な支援や配慮を工夫

事例

授業スキルアップ10のポイント

IV 環境づくり…………… 25

V 授業研究の方法…………… 27



みんなの特別支援教育を目指して

「みんなの特別支援教育」とは



特別支援教育とは障がいの有無にかかわらず、すべての子どもたちのためにすべての教員がかかわる教育です。

そのためには、一人一人違う学び方をしている子どもたちを理解し、楽しく「わかる、できる」ように工夫、配慮された授業を行う必要があります。それが「授業のユニバーサルデザイン」です。通常の学級における授業デザインをどう組み立てるかは、特別支援教育と教科教育の融合が必要になり、安心して過ごせる学級集団づくりが大切になります。すべての教員が特別支援教育を理解し、「わかる授業と楽しい学級づくり」の形成のための研修システムの開発が必要になってきます。

みんなの特別支援教育実現のために、文部科学省初等中等教育局長「特別支援教育の推進について（通知）1. 特別支援教育の理念」に以下のように述べられています。

特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。

また、特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。

さらに、特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。

このような国の動向等を踏まえ、幼稚園から高等学校における特別支援教育の充実に向けて、教師自身の意識改革を図り、より高度な専門性を身につける必要があります。教師における専門性の向上とは、授業力と学級経営力を高めることに他なりません。授業や学級経営を行う上で子どもたち一人一人の実態を理解し、教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図ることが求められています。

学校教育は集団での活動や生活を基本とするものです。学級が安心できなかつたり、授業がわからなかつたりする状態が長く続くと子どもたちの心に不安な状況が生まれ、特別な支援を必要とする子どもたちは二次的な問題を引き起こす可能性があります。

安心して過ごせる学級集団づくりを実現することは、すべての子どもが楽しく授業に参加でき、「わかる・できる」ことにつながっていくと考えられます。

本誌が「みんなの特別支援教育」と「授業のユニバーサルデザイン」を進めるための一助となることを願っています。



KUIS発『みんなの特別支援教育』

～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～

I 教師の 子ども理解

子どもの理解を深め、教師との信頼関係を築きましょう

「子ども理解のためのアセスメント」とは

子ども一人一人の特性を理解するアセスメントとは、「子どもについての情報を様々な角度から収集し、それらを整理分析して、子どもの実態や全体像を理解していくプロセス」のことです。

したがって、医学的な検査や知能検査だけでなく、学校で見られる子どもたちの行動の様子や学力の状況、家庭環境等を的確に把握し、子どもたちの得意なところと苦手なところを見つけることが大切です。子どもたちの得意なところが見つかりと指導を行う上でのきっかけ作りができます。また、苦手なところが見つかりと「つまずき」の背景のメカニズムが解明されます。教師は結果としての「つまずき」ということだけを見ずに、「なぜできないのか」、「どうしたらできるのか」という観点を持つ必要があります。



☑ 子どもたち一人一人の特性を理解する

子どもたちは「先生からほめられたい。認められたい」という願いや欲求を持っています。また、教師は授業を展開したり、学級経営をしたりする中で子どもたちの一人一人のニーズを受け止め、人間として成長・発達させることが大切になってきます。そのためには教師自身が子どもたちを見る手立てをいくつ持っているかが重要な課題になってきます。

子どもの特性理解の視点

事例〈1〉

『話を聞いていないA君をどう理解するか?』

【実態例】 9月。運動会の練習が始まっています。4年生のA君は、学級で担任の先生から聞いた集合場所に時刻を過ぎてても現れません。A君以外の子どもたちは、指示どおり、全員集合することができました。事情を聞かれたA君は、「飼育小屋でニワトリをずっと見ていました。でも僕は、朝、集まる場所も時間も聞いてなかったよ。」と言い張ります。



1 つまづきの背景

中学年の子どもは遊び盛りです。それでも、遊びと勉強の時間を意識的に切り替えるなど学校生活への順応力が高まってくる時期でもあります。教師の指示を一度聞くことにより、その内容を理解し適切な行動が取れるようになってきます。子どもたちの中には話を聞いているのですが、状況によっては、話の内容が聞き取れず指示が理解できていないことがあります。A君のように、一見すると遊びに夢中になって時間を忘れていたかのように感じとれますが、実は、大切なことがらを聞き取れなかったため、学習活動に参加しそこなったという場合もあります。

集団場面で、A君のように「指示」の理解の不十分さが目立つ子どもがいます。教室での教師のことばは聞こえてはいても、友だちの声や周囲の物音も同時に脳に伝えられ、必要な情報（この場合は集合場所・時間）を聞き分ける処理、つまり、聴覚情報を処理する過程につまづきのある子どもがいることが指摘されています。

教師の言葉かけの意味や要点を聞き分けることが苦手な子どもは、要点を聞き落したり、一部を聞いてそれだけで行動に移してしまったり、自分に都合よく聞いたり、学習の場面で聞き取りの困難さによる失敗を繰り返していると考えられます。

2 指導の工夫のポイント

プリントや黒板に書かれた課題にどのように取り組んでいるか（視覚情報の処理はどうか）、詳しく観察してみましょう。課題に沿った取組みがほぼできているようであれば、「文字による指示が効果的である」ことが分かります。そこで、集団場面では、言葉だけでなく、文字で指示する、文字を活用するような配慮の方法が考えられます。

Point

- ◎ 一斉に指示した後に、個別に要点だけをもう一度確認します。（要点の提示）
- ◎ 周りの音をできるだけ少なくし、静かな場面をつくって話をするようにします。
- ◎ 本人のそばで、注意を引きながら、全体に話をすることが大切です。（「聞く」から「聴く」へ）
- ◎ 似通った音のことばは、聞き間違いがおきやすいので、身体表現やカード等で特徴づけ、わかりやすい視覚情報による補足が必要です。
- ◎ 聞いたことばを復唱させ、何音節まで聞き覚えることができるかを確認する必要があります。（聴覚的短期記憶の確認）

【「困った子ども」から「困っている子ども」への視点の転換

✓ 好きなことや興味・関心のあることを把握する (得意なところ)

日常の雑談や行動観察の中で子どもたちの好きなことや興味・関心のあることを観察し、発見することは大切です。得意なところがわかれば、学習の導入時のきっかけや活躍の場の設定に役立ちます。

✓ 苦手なことを把握する

子どもたちの見え方や聞こえ方、感じ方、記憶や理解の仕方等の認知といわれる脳の処理過程の特性を理解し、それを踏まえて指導・支援に生かすことも重要なポイントになります。

- ◎ 聞いて理解するより、見て理解する方が得意 ⇨ **視覚支援を活用します。**
- ◎ 手順が明確でない活動は正確に行うことができない ⇨ **活動の順序、見通しを明確にします。**
- ◎ 二つのことを同時に処理するのが苦手 ⇨ **一つずつの提示と作業環境の工夫をします。**
- ◎ じっとしていることが苦手 ⇨ **動作化を取り入れた創造活動場面の設定をします。**
- ◎ 注意の集中が悪く落ち着かない ⇨ **教室の静寂化と前面壁の簡素化を図ります。** 等々

✓ 気になる言動の要因・背景を考える

「なぜ気になる行動が起きるのか」その理由を考えてみる。子どもたちに対して注意や叱責をする前に、気になる言動の要因・背景を考えることも大切です。要因・背景がわかれば指導の手立てはたくさん出てきます。

例えば、授業中に立ち歩く要因・背景は、「何をしてもかわからない」「注目してほしい」「課題が高すぎる」「座らなければいけないということがわからない」「指示がわかりにくい」「面白くない」「聴覚や視覚情報の過敏」等々。

✓ 「できない」から「なぜできないのか」「どうしたらできるのか」へ

子どもたちの気になる言動の見方を、結果だけを見た「～しかできない」ではなく「なぜできないのか」「どうしたらできるのか」という要因分析をする見方へ変える必要があります。教師の意識の変化によって「～ならできる」「～もできる」というような見方になり、子どもたちだけでなく教師自身のモチベーションも高まってきます。

✓ 日頃から子どもたちの気持ちを共感的態度で受け止める

子どもたちの気になる言動の理由や言い訳、言い分（「どのように感じたか」「どのように思っているか」等）を、子どもたちの気持ちに寄り添いながらじっくり聞くことはとても重要です。



II 人間関係の形成と 学級経営の方策

認め合い、支えあう学級集団作りとは、学級や学年のルール作りとルールの明確化を図ることが大切です。安心して生活できる学級集団を作るためには、学校の教育目標に沿った「どのような子どもたちに育ててほしいか」を明示し、子どもたちと一緒にルー

ルを決め、望ましい行動の仕方を具体的に提示することが必要になります。子どもたちは一定のルールの下で、自分を安心させ、お互いに認め合うことができます。ルールの必要性を理解し、定着を図る取り組みから始めることが第一歩です。

学級経営で大切なこと

行動に対しての評価をする場所

子どもたちが行った学習や行動に対して、評価基準を明確にし、適切な評価をすることが大切です。

些細なことでもほめる、認められる場所

「それぐらいできて当たり前」ではなく、取組の過程における小さな「できた」を大切にしながら些細なことでもほめることで自己肯定感が高まります。

居心地のいい場所、存在感のある場所

学級内外で子どもたちががんばっている様子や役割を果たすために努力している様子などを紹介したり、励ましたり、子どもたち自身が「自分は学級の一員である。大切にされている。」ことを実感できるようにすることが大切です。

✓ 学級や学年のルール作りの工夫

基準が明確で分かりやすいルールを作る

- 「いつ」「何を」「どこに」「どうする」等を具体的に決める必要があります。
(例) ロッカーの使い方: 上にカバン、下に学校に置いておくもの等
- 教室や廊下等の見やすいところに掲示すると一見して分かりやすくなります。
- 活動を行う前にルールを復唱して、確認したり意識づけを図ったりすることも効果的です。
- ルールが守れている時を見逃さず、認めたりほめたりすることが大切です。

ロッカーの中は
整理かごを
使って!



置き場所が
分かるように
目印を
つけましょう!



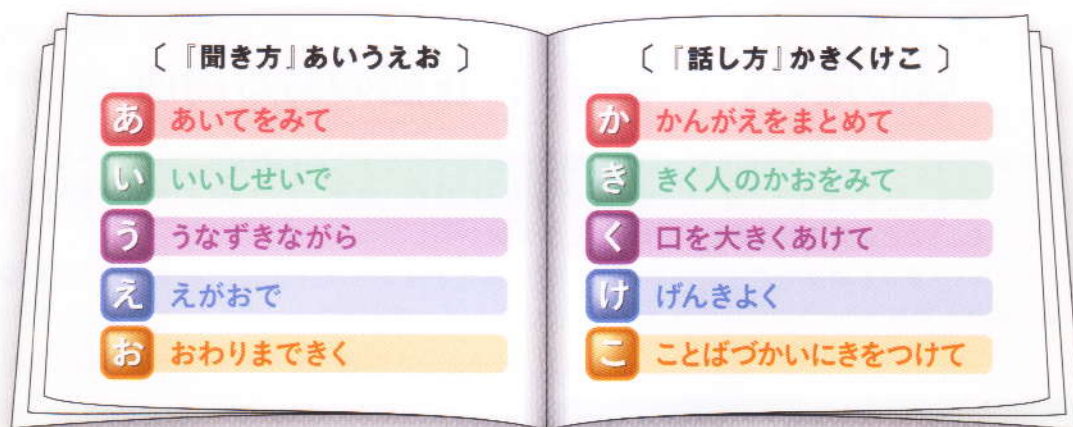
✓ 学級経営で人間関係づくりを学ぶ機会や場を積極的に設ける

核家族化や少子化等、社会環境の変化により、人間関係づくりを学ぶ機会が少なくなっています。こうした状況の中、学級集団で人間関係づくりを学ぶ機会や場を積極的に設ける必要性が高まっています。子どもたち同士の関わり合いを確立するには、子どもと教師の信頼関係を基盤としながら相互をつなげていくことが大切です。そのために、個の特性に応じた指導・支援を行うとともに、学級全員で友だちへの望ましい関わり方を学習する機会や場を設け、学級集団としても人間関係づくりのルールやマナーを身につけていくことが求められています。

あいさつの習慣化や「聞き方」「話し方」を常に意識した取り組みを進める

- ルールに基づいた練習をする。

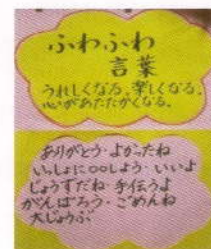
(例) 「うなずきながら聞く」「話し終わるまでは質問をしない」「時々質問しながら聞く」等



友だちとよりよくつながる言葉や相手を傷つけない言葉を見つけ、相手の気持ちを考えた話し方を練習したり、自分の感情に気づいたりする学習を取り入れる

- 「ふわふわ言葉」を見つけて、好ましい言葉遣いを掲示し習慣化を図ることが大切です。(写真1)
- 場に応じて声の大きさを調整することが苦手な児童生徒が、ルールを常に確認することができるように、掲示しておきます。(写真2)
- 相手の気持ちを考えることが苦手な児童生徒には、状況を絵や図で示し、視覚的に把握できるように配慮することも必要になります。
- どんな時に、「カッとしたり」「イライラしたり」するのか考えてみましょう。
- 感情表現が難しい子どもには、マンガやイラスト等の視覚情報を活用することも必要です。
- 本人の対応方法と周囲の対応方法の両方のスキルを身につけさせることも大切です。

(例) ● 本人：「深呼吸をする」「落ち着けるスペースに行く」等
● 周囲：「静かに見守る」「励ましや応援の声をかける」等



(写真1) ふわふわ言葉



(写真2) こえのものさし

「聞く」「話す」スキルの系統性を理解する

基本となる話し方・聞き方を繰り返し指導し、各教科の話し合い活動を工夫すれば、話す・聞く力が身につき、コミュニケーションが向上すると考えられます。自他の考え方の共通性や違いへ気づき、他者の意見により、新しい考え方に気づきます。また、他者の意見により、自分の考え方の付加・修正ができることも多くあります。

幼稚園 から 小学校低学年 の「聞く」「話す」スキルの系統性



身近なこと・経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出す。

相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通という言葉との違いに気をつけて話す。

姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意してはっきりした発音で話すこと。

大事なことを落とさないようにしながら、興味を持って聞くこと。

互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと。

小学校中学年 から 高学年 の「聞く」「話す」スキルの系統性



関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモする。

相手や目的に応じて理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。

相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと。

話の中心に気をつけて聞き、質問したり感想を述べたりすること。

互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合うこと。

小学校高学年 から 中学生 の「聞く」「話す」スキルの系統性



考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係づけること。

目的や意図に応じて事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

共通語と方言との違いを理解し、また必要に応じて共通語で話すこと。

話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。

互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

✓ 学級経営案を作ってみよう

学校、学年目標から学級目標を設定し、学級経営方針を明確にしましょう。目指す学級像はどのような学級かをイメージし、教師個人として、集団としてどのような学級をつくりたいのかを子どもたちといっしょに考えることも大切です。

学級経営案 (例)

3年 ○○組 名前 ○○ ○○

01 学年・学級目標

《学年目標》

“めあてをもってがんばる子” “友だちの気もちがわかる子”

学年目標を達成するための手立て

◎ めあてをもってがんばる子

3年生の階段は大きい。そう言って始まった3年生。新しいことがいくつもスタートする中でひとつひとつが自分の成長につながることに、高学年への足がかりであることを感じさせたい。追い立てるのではなく、自分からひとつ上を目指したくなるような声かけをしていきたい。

◎ 友だちの気もちがわかる子

一人一人ががんばれる環境を整えて力を伸ばしながら、と年には必ず仲間がいて、一緒にがんばっていることを伝え、そのことを感じる感覚を磨いていきたい。チームや班で活動するときには、周りにいる友だちのことを考えて行動する習慣がつくように働きかけたい。

《学級目標》

“となりの友だちと手をつなぎ、えがおいっぱい、みんなですすもう”

02 学年・学級経営方針

◎ とんりの人と手を取り合う

集団として成り立つ以前に、まずはひとりで頑張れる子にする。そして、誰であれとなりにいる友だちをまず大切にすることから、集団に広げる。となりの友だちといつでも話せる、助けあえることを目指す。

◎ えがおいっぱい、みんなですすもう

「できた」「みんなでやった」という達成感を味わえるようにする。一人の10歩より10人の1歩。でも、1歩で満足するのではなく、「もっと」という欲求を満たしていきたい。

03 めざす子ども像・学級集団

- ◎ **だれかのためにがんばる**……そうじや当番、係の仕事を進んでできる子。
- ◎ **自分のためにがんばる**……できることを増やそうとする子。当り前のことをきちんとし続ける子。
- ◎ **ひとりひとりの存在がきちんと光るような集団**
……ひとりひとりがしっかりと立ち、全員がたがいを支え合う学級。

04 こんな学級にしたい

◎ 毎朝行きたくなる教室にする

間違えても、失敗しても頭ごなしに叱られることのない、きちんと理解してもらえる、自分の居場所がいつもある教室にしたい。困った時には「困っている」「助けてほしい」と言える教室にする。

◎ 意欲を引き出す

学習の導入や活動の始まりに、しっかりと趣意説明をする。そしてゴールを示し、途中には経過をきちんと評価する。今自分がどの位置にいるのかがわかり、どのくらい先にゴールがあるのかがわかるようにすることで、意欲が持続できるようにする。

◎ 自己肯定感を持たせる

【一人一役】：毎日当番の活動で自分もみんなの役に立っている、という責任感を育て、やり遂げることの大切さを伝えたい。

【ほめる】：できていることを積極的にほめる。前よりできていること、がんばろうとしていることも含め、どんどんほめるところをさがして見つけてほめる。

【「今週できるようになったこと」の継続】：毎週、道徳の時間に「今週できるようになったこと」を書く。ほんの小さな自分の成長でも、毎週書きためることで1年間を振り返った時に、自分の成長を実感できると考えている。また、書いたカードは一旦集め、すぐばらばらに配り、手元きた誰かのカードに一言メッセージを書く。書いたらカードの持ち主に直接渡しに行く。友だちからの温かいメッセージがまた励みになるように、男女関係なく交流する機会を作る。

◎ 子ども理解・家庭状況など背景の理解を深める

ひとりひとりの特性をしっかりと理解し、一番効果的な手立てを考える。また、家庭環境を把握し、子どもたちの背景を理解する。その上で、支援の方法を考えて、実践する。

05 学級の中で学習の力をつける

◎ 学習の力をつける

低学年の間に、言葉を増やすこと・読み取る力・表現する力などが必要不可欠である。

表現することを習慣化する ①日記 ②ケンカは当事者同士の話し合い解決 ③意見のたたかい ④となりの人と話す

言葉を増やす ①暗唱 ②書き取りの宿題 ③ことわざ・慣用句 ④読み聞かせ

学年初めの3日間を大切に

指導例



4月〇日 | 第1日目

大切な第1日目“出会いを大切に”

《1》出会いに際して

- 全員の顔があがる、目が合うまで待ってから話しましょう。
- 大事なことを話すときには「今から大切なことを言います」と予告しましょう。
- 言葉は短く、要点を話しましょう。3つ言います、と予告して、黒板に書くのも有効です。
- 机の上には何もおきません。
- 手は膝の上(頬づえや手遊びをしないように手の場所を言っておきます)
- 先生は明るく、楽しく、けじめをつけて話しましょう。
- できていない子を指摘するより、できている子をほめましょう。
- できていないことをいう時には、にっこりやんわりと。
- 「〇〇しません」と言うより「～しましょう」と望ましい行動を教えてあげましょう。

《2》全員の名前を呼びます

- 返事は「はい」と大きな声で。できていたらすぐに名前を言って、ほめる。もしできていなかったらやり直しをする。たぶんほとんどの子が思いきりいい返事をします。どんどんほめましょう。

《3》短いあいさつ(担任の自己紹介)をします

《4》先生の願いを話します

- 先生が叱る時3カ条 **危ないことをした時** **友だちをいじめた時** **3回言っても聞かない時**

《5》配布物を配る。「どうぞ」「ありがとう」のリレーで

- すぐに名前と日付を書かせます。名前は必ず丁寧に書かせ、雑な子にはすぐ書きなおさせます。

《6》質問を受け付けます

- できるだけ文末までしっかり話させます。できない場合は話し方を教えて手伝います。
- 配られたプリントを丁寧に折らせませす。折ったら机の右端に重ねて置かせます。
- とんりの人のプリントと、折り方比べをさせます。配布物は丁寧に扱う習慣をつけさせます。

《7》掃除をします

- 「そうじを一生懸命にする子が大きいです。そうじを一生懸命にする子は必ず成長します。大人も子どもも一緒です。そうじはだまっています。一人の時間です。よいと思うことはどんどんやりましょう。ふざけたり、遊んだりする人は3年〇組の中にはいないと思いますが、一番いけないのは何もしないことです。今からそうじをがんばりましょう。

《8》次の日の連絡をします

- 連絡帳に丁寧に書かせます。書けたら見せにこさせ、ていねいに書けていない子には書き直しをさせます。

《9》「さようなら」をします。さよならジャンケン など

4月〇日 | 第2日目

《1》朝、黒板に学校に来たらすることを書いておきます

- ランドセル・上着をかたづけます。
- 連絡帳を開いて、先生の机の上に置きます。
- 児童指導資料・保健調査表・封筒はまだ出しません。(個人情報なので、慎重に扱う)
- 先生がくるまで教室で待ちましょう。

《2》学級指導

- 朝のあいさつをします。
- 出席をとります。大きな声で返事をさせます。
- 布物を回収します。

《3》係の仕事の決め方

- 係の仕事の説明をします。どの仕事もなくてはならない仕事であることを伝えます。
- 「全員立ちましょ」「自分のやりたい仕事が決まったら座りましょ」
- 決め方を話します。「やりたい仕事のところに名札を貼ります。もし同じところにたくさん名前があったらどうして決めたらいいですか？ジャンケンでもいいけれど、どんな仕事でも一生懸命がんばれますね？では、なかよく決めましょ」
- 列ごとに名前のマグネットを貼りに行かせます。迷っている子は席に戻させます。
- その仕事に一人しかいないときは決定し、仕事を赤で囲みます。ずっと自分から仕事をうつる子がいたらほめます。重なっていたらジャンケンで決めさせます。
- 仕事が全部決まったら、名前と自分の仕事を言わせます。「〇〇係です。～～をします」

4月〇日 | 第3日目

《1》朝、黒板に学校に来たらすることを書いておきます

- ランドセル・上着をかたづけます。
- 連絡帳を開いて、先生の机の上に置きます。
- 先生がくるまで教室で教科書を読んでいきましょう。

《2》自己紹介

- 話す内容を3つ話す。(黒板に書く)

- ① 名前と去年のクラス
- ② すきな食べもの
- ③ 一番楽しみな教科
- ④ よろしくおねがいします

みんなで
大拍手!!!!

- まず担任がお手本を示します。
- 時間がかかってもいいので、できるだけたくさんしゃべれるように促す。がんばったところはたくさんほめること。

拡大して黒板に貼る⇩

わたしの名まえは『〇〇〇〇』です。きょ年は2年1組でした。すきな食べものは『ぎょうざ』です。とくに自分がつくるぎょうざが一番すきです。中には、はくさいやお肉を入れて作ります。つつむのは時間がかかるけど、作ったぎょうざがたくさんならんでいるのを見ると、うれしくなります。みんなにも食べてほしいです。

一番楽しみな教科は『どうとく』です。いけんのたかいたが大好きです。今年もたかいたたいです。よろしくおねがいします。



KUIS発『みんなの特別支援教育』

～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～

III

授業づくり

子どもたちの特性に応じた支援を取り入れ、
学びを保障しましょう

“授業のユニバーサルデザイン化をめざして”

■ 特別支援教育の視点を導入する

授業づくりにおいて、特別支援教育が大切にしていることは「個々の子どもの実態把握から、授業をどう作り、どのように展開したいかを考え、授業の中でどんな力をつけさせたいか」ということにつきます。これは、障がいの有る無しにかかわらず一人一人の実態を客観的に見極め、学び方の違う40人に対して、学級づくりや教科教育の中でどのようにわからせるかということになります。教師は、子どもたちの一人一人のニーズを受け止め、人間として成長・発達させることが大切になってきます。そのためには特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりがとても大切になってきます。

☑ 分かりやすい授業の構成を工夫する

教室の中で支援を必要とする子どもたちは、状況に応じて臨機応変に対応したり、先の見通しを持ったりすることが苦手な場合があります。

子どもたちが目標やめあてを持ち、主体的に学習に取り組むことができるように、子どもたちの特性に応じた支援を取り入れることが大切です。

【導入や展開の工夫】

授業の準備の仕方を示します

- ◎ 学習に必要な準備物や準備の仕方を具体的に示します。



授業の進め方や注意を引きつける導入を工夫します

- 「おもしろそう」「できそう」「やってみよう」と意欲を高めたり、注意・集中を促したりして、子どもたちが学習に向かう姿勢をつくることはとても大切です。

導入時の参考例

- 学習の開始は「身体の一部を動かす活動」から始めます。

「身体の一部を動かす」活動とは、例えば、国語であれば、音読、書字（空に腕で書く）。算数であれば、九九や公式の暗唱、数唱。体育であれば、寝転がって足だけ、手だけ動かすなどです。全身が動いては離席や教室からの飛び出しになってしまうので学習にはなりません。身体の一部、口や手を動かすためには、身体の本来的な部分は自然に止まっていなければいけません。身体の一部を動かすことで、身体の大部分を落ち着かせることができます。

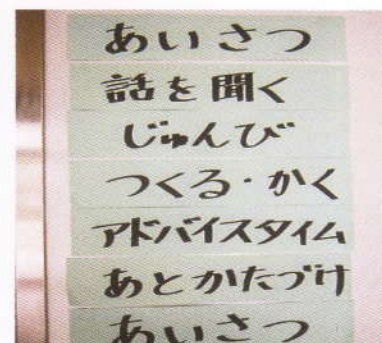
“身体部分を動かすことで落ち着く”



- 復習のための小テスト、フラッシュカードによる一斉音読、「○×クイズ」等で注意・集中を促します。
- 絵や写真、映像等を活用し、意欲を高めます。
- 子どもたちの興味・関心、生活との関連性がある活動や話題等を取り入れます。

教科の特性に応じて、授業の流れをパターン化する

- 学習のねらいや見通しを明確にするために、カードや小黒板等の視覚支援を効果的に取り入れます。
- タイマーやカード等を活用し、活動の始めと終わりを明確にし、時間が見える形にすることも見通しが立てやすくなります。



✓ 授業の展開における具体的な支援や配慮を工夫する

支援を必要とする子どもたち一人一人の教育的ニーズに対応するために、言語環境の整備、効果的な机間指導、主体的に取り組めるよう工夫した教材・教具等、学年に応じて個への配慮を一斉授業の中に取り入れていくことが必要です。

学習目標を達成し、「できた」「わかった」という成就感や満足感を持つことができるように授業の展開における工夫改善に努め、子どもたち一人一人の特性に応じて、必要な支援を行っていくことが大切です。

【指示や発問の工夫】

分かりやすい説明や指示は、「今何をするのか」や「今何を考えるのか」を明確にし、子どもたちの学ぶ意欲を高めることにつながります。視覚支援等を効果的に活用し、子どもたちが理解しやすいような伝え方や適切な話し方に努める必要があります。

◎ 話す前に見通しを示すことが大切です。

「これから3つのことを話します」「〇〇について話します」と、事前に予告します。

◎ 具体的な言葉を使うとわかりやすくなります。

「ちゃんと」「きちんと」ではなく、「はねに気をつけて書きましょう」「目を見て聞きましょう」等、具体的に示す。「あれ」「それ」「向こう」ではなく、目印や方向を示す。

◎ 指示の出し方を工夫しましょう。

子どもたちに共通した苦手さは、聞くことです。学校で「聞けない。」というときには、①聞き取りそのものから、②聞いて記憶すること、③理解判断すること、④実行すること までを含んで言っている場合が多く見受けられます。従って、指示を出す場合には、子どもが先生を見ているかどうか確認する必要があります。向いていなければ、肩を叩くなどして注意喚起しなければいけません。決してことばで注意してはいけません。聞いて記憶することは大概苦手です。6年生になっても3語程度しか覚えられない子どももいます。くどくどと説明してはいけません。言葉だけから理解判断することは、難しいので、目で見せ、視覚的に補う必要があります。

◎ 指示と併せてモデルを示すとわかりやすくなります。

絵や写真等を併用することも大切です。大事な言葉やキーワードを提示します。(小黒板やカード等の活用)

◎ 活動や作業を止めたり、話す人や黒板等に注目させたりして、聞く姿勢を整えてから指示や発問をすると聞きとりやすくなります。

◎ 座席の位置を配慮しましょう。

◎ 指示を復唱する。

“物を見せながら指示する”

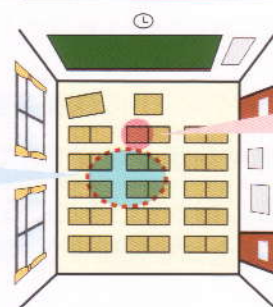
教科書
27ページを
開けます。

指示の文は短く



先生の指示や、
まわりの友達の状況が
見やすい
2列目くらいの席へ。

“座席の位置の例”

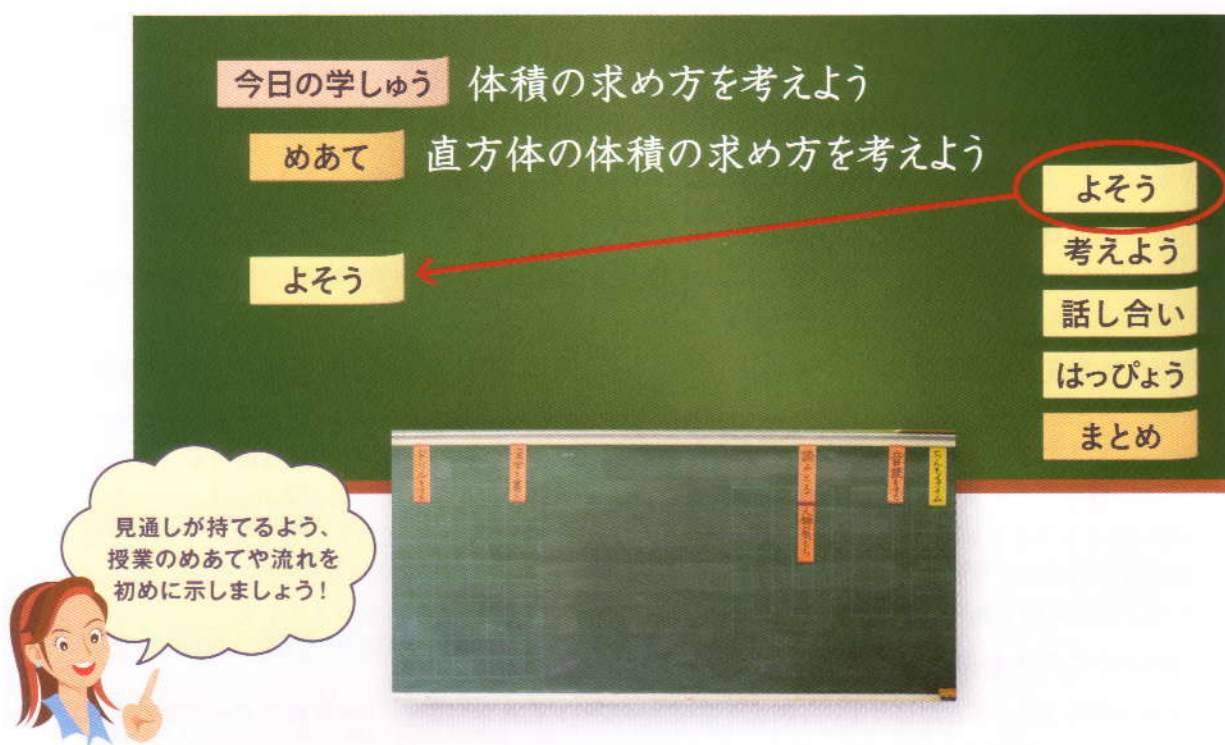


モデルに
なる友達の
配置。

【板書の工夫】

板書は学習中の視覚的な手がかりとなります。学習の見通しを示したり、内容の確認を行ったり、記憶を助けたりするものとなるので、見やすさに配慮した板書を行う必要があります。

- ◎ 見やすい大きさの文字で書きます。
- ◎ 色チョークを活用し、活用の仕方を決めておきます。
- ◎ 短冊黑板や小黑板を子どもたちの発表等の場面に活用します。
- ◎ 黑板を分割して使い、学習の流れを示します。
- ◎ 重要な用語にふりがなをつけたり、大切な箇所を分かりやすく示したりします。



【机間指導の工夫】

子どもたち一人一人に対して授業の理解度を評価しながら、できていることを認めたり、つまずきに対する適切な支援を行ったりする貴重な機会として机間指導が大切になります。

一斉指導の中で机間指導による個の特性に応じた支援を行うためには、理解の早い子どもたちに対応するための課題の準備をしておくことにも配慮する必要があります。

- ◎ ノートやワークシートに称賛の言葉や印をつけます。
- ◎ 活動の流れや指示が理解できていない時に、個別に再確認したり、メモで示したりします。
- ◎ 子どもたちの困っているところがわかり、つまずくところが予測できれば一か所に長くとどまるのではなく、教室全体を見渡して、効率のよい集団の中での個別指導ができます。

個の特性に応じた支援例

読むことへの支援例

- 1行だけ見えるように切りぬいたシートを準備します。
- 文字の形を捉えやすくするために、絵カードを使って形の意味づけを行います。
- まとまりを言葉で捉えるために、フラッシュカードですばやく読み取る練習を取り入れたり、キーワードに印をつけたりします。

ひらがなの書字が進まない子

- ① 歌を歌いながら、「へのへのもへじ」を描かせます。初めは、指導者が描いた絵をなぞらせます。
- ② 指導者のまねをしながら、体で大きく空書きをさせます。両手を合わせて正中線を越えるようにさせます。
- ③ 利き手で、大きく空書きをさせます。
- ④ 用紙に書かせます。(大→小)

☆「く」は書けるが、「へ」が「/ \」（上から2本かく）になります。

スタートの位置に印をつけて、「ビーンビーン」などと言語化しながら書きます。



計算することへの支援

- 計算の手順を言語化したカードや手順書を活用します。
- 問題数や習熟度に配慮したワークシートを作ります。
- 計算の意味づけを行う具体物や半具体物を活用します。
- 筆算がしやすいマス目や枠のあるワークシートを準備します。
- 大きな数が分かりにくい子（位が理解できない）

☆「3415」は・・・

千	百	十	一
3	4	1	5

はらすと

千	百	十	一
3	0	0	0
	4	0	0
		1	0
			5

重なっていたら
4桁に数字

☆「千が2つ、百が6つ、一が4つの数は？」

千	百	十	一
2	6		4

と書き、数字を入れていきます。
空いている□は、「0」
答えは、「2604」

事例〈2〉

**集中が長持ちしないため、
授業中の活動から逸脱してしまう**

【実態例】 Gさん(小3)は、普段から落ち着きがなく、一つのものごとに集中し続けることが難しい子です。課題に取り組める時間が短く、フラッと席を離れてしまいます。

【指導例】

1 不必要な情報(刺激)を排除する

集中を持続させるためには、現在行っている活動に「注意」というアンテナをしっかりと立て続ける力が必要です。それと同時に、不必要な情報を「雑音」としてカットする、ラジオのチューニング合わせのような力も必要です。不必要な刺激に注意を奪われないよう、教室内を整理したり、クラス全体を落ち着いた雰囲気にしたりする学級経営から始めます。

2 得意な分野を見極め、集中の持続を促す

次から次へと興味の対象が移りやすく、結果的にどれも中途半端に終わってしまう、ということが多いGさん。こつこつ努力することが苦手です。ただし、すべての活動で努力が長続きしないというわけではありません。好きな活動、もともと関心が高い内容であれば、普段見せない集中力を発揮することもあります。集中にむらがあることを理解し、得意な部分から集中の持続を促します。

3 成し遂げられることを事前に示し、ハッピーエンドで終える

個別に指示を伝えるときには、「どのような内容をどれくらいの時間で成し遂げるのか」「終わるとどうなるのか」といった活動の見通しを事前に伝えるようにします。例えば、授業中に水を飲みに行きたいと訴えてきた場合も、「水飲みなら1分以内ね。それ以外はだめだよ」と伝え、タイマーをセットし、1分以内でもどってこられたら「達成」できたことを一緒に喜びます。ハッピーエンドで終わることが行動修正のポイントです。

【工夫の例】

見通しをもてるように、黒板が全部埋まったら終わり。



事例〈3〉

整理整頓が苦手なため、
授業準備や課題への取り組みが遅れる

【実態例】 Hくん（小5）の机の周囲はいつも散らかっています。前の時間の教科書や教材がそのままの状態なので、ノートをとるときも安定した置き方になりません。準備や作業への取り組みもスタートが遅れがちです。

【指導例】

1 「できて当たり前」という思い込みを捨てる

Hくんの学年（小5）で身の回りの整理ができないと、ついつい対象児の努力不足（「やろうとしないからできない」という気持ちを抱いてしまいがちです。しかし、そうではなく、自分なりの整理術がまだ未形成だ（「そもそも身につけていない」と理解しましょう。一緒に、初歩的な段階から整理術が身につくように教える必要があります。

2 指示を具体的に出す

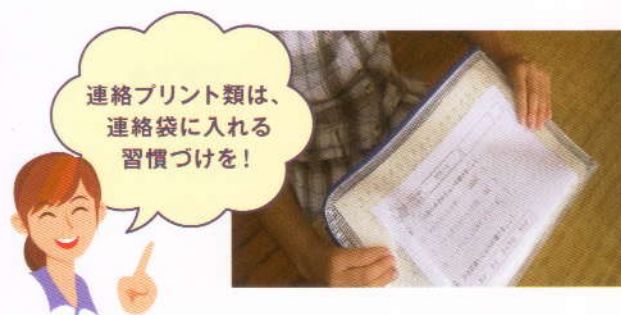
「ちゃんとしなさい」「しっかり片付けなさい」といった抽象的な指示では何も身につけません。何をどこに置くのか、具体的に指示します。置くべき場所が定められていないと、「どこでもよい」の状態に陥り、結果的にものが散乱します。置き場所の理解が明確になるよう、ファイルやケースを用意します。必要であれば整理された状態の写真も貼っておきます。

3 「なんでもボックス」を活用する

机上の整理を確実に実現したい場合には、「なんでもボックス」を机の側に用意し、授業が終わったらそこに一旦全てを入れ、帰り際に分類する時間を設けます。定着したところでボックスを2つにし、その場で分類しながら入れ分けます。

4 収納しやすく、取り出しやすい道具・方法の準備

収納や取り出しに時間がかからない収納方法にしましょう。



事例〈4〉

衝動的な発言が多く、
授業中の活動から逸脱しやすい

【実態例】 Jさん(小5)は、質問の途中で最後まで聞かずに「それは〇〇のことでしょう!」と的外れな質問をしてしまいます。話を最後まで聞いて考えてから答える、ということが苦手なようです。

【指導例】

1 「質問⇒挙手⇒指名⇒発言」のルールを再度確認する

高学年だからといって発言にルールがあることが定着しているとは限りません。改めて、発問者である先生と、解答者である子どもたちとのやりとりのルールを確認しましょう。「質問⇒挙手⇒指名⇒発言」というルールであれば、やりとりが2往復になっていることを伝えます。

2 自分の意思を伝える方法を多様に用意する

衝動的な発言が多い子に、「先生の質問を途中で遮らない」「友だちの学習の邪魔をしない」といった我慢タイプの目標はうまくいきません。むしろ、自分の意思を伝える方法が発言しかないということを見直す必要があるのではないでしょうか。以下のように多種多様な解答方法を用意しましょう。

解答方法

- ◎ 質問を聞いてわかったら、ワークシートに記入する。
- ◎ 質問の後で選択肢を示し、その番号を指で作って見せる。
- ◎ 質問を聞いて、隣の人と相談し、意見を統一させてから挙手する。 など

3 ポジティブな子ども理解を

衝動的な発言は、アイデアの豊かさの裏返しかもしれません。「待てない」「我慢できない」といったネガティブな子ども理解のままでは、Jさんは悪い子になってしまいます。思い立ったらすぐに行動に移せる実行力を認めるような教師のポジティブな子ども理解だけで、自然と衝動的な発言が減るようなこともあります。



● 授業スキルアップ10のポイント

1 一時に多くの指示を出してはいませんでしたか

各クラスとも、短期記憶の苦手な子どもたちの在籍が予想されます。「子どもたちにとって、わかりやすい言葉で明確な指示か。」「子どもに迷いのない指示か。」を振返ってください。

2 教師の説明は端的でしたか

特に、学びに困難を感じる子どもたちにとって、長い説明はその内容が頭で再構成できず、入力につながりません。クラス全体の授業のトーンも下がります。

3 発問や指示は全員に伝わっていましたか

子どもたちの思考や作業がぐらつく指示・発問では、授業が混乱します。また、全員がわかっていないと授業が混乱します。

4 出された資料や教材は一目でわかる工夫をしていましたか

多くの学びに困難を感じる子どもたちにとって、視覚入力の困難さが指摘されています。また、短期記憶の弱い子どもたちや言葉が素通りする子どもたちは、視覚情報が重要な手がかりとなります。大切な情報がストレスなく入力できる視覚情報が重要です。

5 心地よいリズムとテンポがありましたか

子どもたちの集中力にとって、心地よいリズムや展開のテンポの緩急は重要です。授業の活気ばかりでなく、集中を維持できない子どもたちの支援として有効です。

6 空白の時間がなかったですか

作業の早い子にも、遅い子にも配慮のある展開が必要です。空白ができると、授業が騒然とし、意欲も下がります。

7 教師は達成状況を確認していただきましたか

作業指示や練習問題で全員の達成状況を確認した上で作業を進めることは学力保障の原則です。担任が全員を良く見て授業をすすめられたかどうか重要です。

8 すべての子どもがほめられ、励まされていましたか

ほめられることで意欲が高まり、自信をもって次に進めます。肯定的な言葉で活動意欲が引き出せます。

9 教材提示、指示・発問の配列は適切でしたか

問いの順、資料提示の順の必然性が子どもの思考と合致します。

10 適切な学習環境でしたか

安心して学べる座席配置、シンプルで余計な情報が視界に入らない教室レイアウト、耳障りなノイズのない環境だから落ち着ける子どもがいます。



KUIS発『みんなの特別支援教育』

～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～

IV 環境づくり



学習に取り組みやすい教室環境をつくる

子どもたちが学習に集中し、学びやすい環境を整えるためには、教室がわかりやすく整理整頓されているとともに、情報量が精選されていることが大切です。

支援を必要とする子どもたちは、必要な情報を適切に選択したり、注意を持続したりすることが苦手です。学習に取り組みやすい教室環境をつくることはとても重要な支援です。

教室環境の工夫参考例

- ◎ 黒板の周りの掲示は必要最小限のものに限定している
- ◎ 教室前面の掲示を学校で共通理解し統一している
- ◎ 時間割、1日のスケジュールを掲示している
- ◎ 1週間、1カ月のスケジュールを掲示している
- ◎ 個人ロッカーや机の中の整理整頓を習慣づけしている
- ◎ みんなで使うものの置き場所や置き方を決めている
- ◎ 提出物や宿題を出すコーナーが固定されている
- ◎ 教師机の上に必要なものだけを出している
- ◎ 学級や学年のルールを掲示している
- ◎ 係活動や当番活動のコーナーがある
- ◎ 机やいすの消音、防音がなされている
- ◎ 子どもたちの実態に応じた座席の配慮や工夫をしている



机の上には、
必要な物だけ出します！



教室は
整理整頓しましょう！



1日の予定も
知らせると
見通しが
持てます！





V 授業研究の方法

授業を行うにあたっては指導案を作成し、授業研究によって授業の質を高める必要があります。ユニバーサルデザイン化された授業を行うための指導案作成にあたっては、今迄の学習の展開だけではなく、子どもたちのつまずきのポイントを予測した指導案作成が必要になってきます。また、授業を見るにあっ

てはどのような観点で授業者が授業をしているのかを明確にし、参観する側もその観点に沿って授業観察を行うことも大切になります。以下に指導案の中に子どもたちのつまずきのポイントを示した部分と授業検討会の持ち方の事例を紹介します。

指導演に挿入してほしい支援を要する子どもの実態と手立ての例

児童	対象児の実態	予想される困難さ	具体的な支援・手立て
 Aくん	<ul style="list-style-type: none"> ● バランスのとれた丁寧な文字を書くことができない。ノートを取るのに時間がかかる。 ● 文章を一文字ずつ読んでいるため、すらすら読めない。また、問題や文の意味を捉えられていないのではないかと感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ なぜその答えになるのかの説明を書くときに、時間がかかる。また、文字が荒っぽくなる。 ▶ ペアでの確認の時に、うまく言葉にして相手に伝えることができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ワークシートを活用し、書く活動をなるべく少なくする。 ○ 文字を時間をかけてゆっくり書くよう声かけをする。 
 Bさん	<ul style="list-style-type: none"> ● 文章問題の意味を理解することができにくい。 ● バランスのとれた丁寧な文字を書くことができない。 ● 割り算の商がなかなか立てることができない。また、掛け算、割り算の計算も出来にくく、算数に対する苦手意識も持っている。 ● やる気が起きなかったり、問題が分からなかったりするため、宿題を時々忘れてくることもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 範囲を考える時に、範囲というのは、どういうことなのか理解できずに、そこでとまってしまう。 ▶ 練習問題の時に、これでもいいのか自信が持てず、取り掛かりに時間がかかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 何を考えるのかということ、1対1で話をし、確認をする。 ○ 範囲を考える時に、答えが書いているか確認し、書けていないようであれば一緒に確認する。 ○ 練習問題の時に、なるべく傍で学習の様子を確認しながら、場合によってはアドバイスをしたり、ヒントカードを渡したりして、フォローする。
 Cくん	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の伝えたいことをうまく言葉にして友達に伝えることができない。 ● 友達に教えてもらう＝自分ができないことがばれてしまう、だから恥ずかしいことであるという思いを強く持っている。 ● 何をすることも取り掛かりが遅いため、スタートが遅れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 発問の意味が理解できない。 ▶ 「一齐に〇〇しなさい」だけでは、取り掛かれない。 ▶ ペアでの確認の場面で、確認を拒んだり、伝えられなかったり、聞けなかったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 何をするのかということ、1対1で話をし確認する。 ○ 範囲を考える時に、答えが書いているか確認し、書けていないようであれば一緒に確認する。 ○ ペアでの学習の場面を見守りながら、スムーズにペア学習が行えるように声かけをする。

✓ 授業研究の方法

授業後の検討会では様々な検討の方法があります。授業の質を高めるためにより多くの先生方の意見を集約し、授業者にフィードバックするには以下のようなワークショップ型の研究協議が有効だと考えられます。

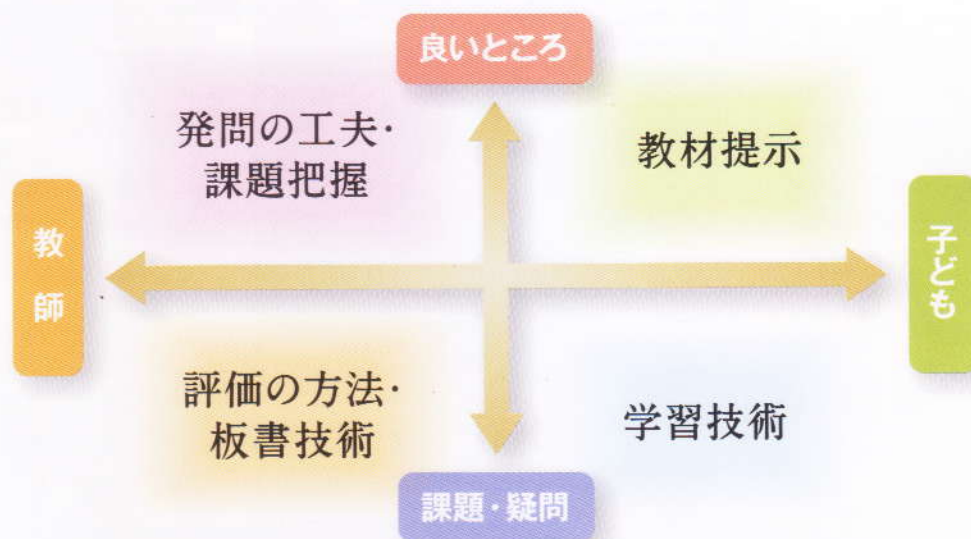
【指導案拡大法】

学習指導案の学習過程に沿って、授業分析を行い、活動の成果や課題を明確にしながら研究協議を行っていきます。

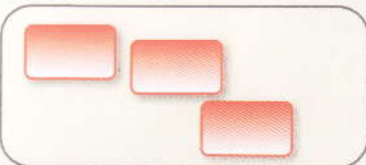
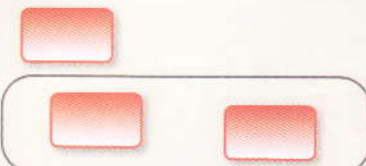

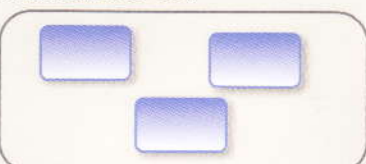




【概念化シート法】

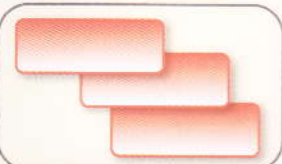
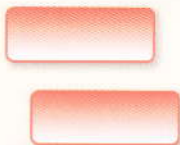
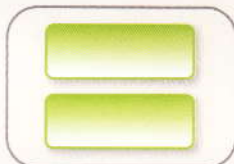
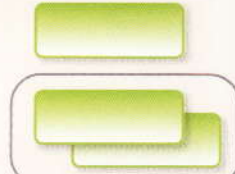
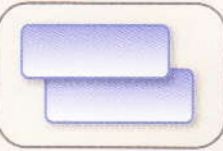


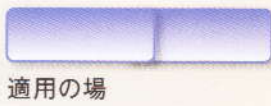
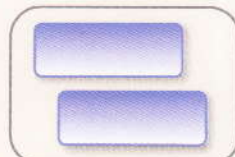
縦軸をプラス面（良かった点、参考になった点）とマイナス面（改善すべき点、問題点）とし、横軸を児童・生徒と教師とします。4象限上に個々の気づきを構造化していくことで、活動の成果や課題を明確にしていきます。



【ワークショップ型授業研究（展開別シート法）】

	導入	展開	まとめ
+	教材提示の工夫 	 自力解決の場	ノートづくり 
-	課題把握のさせ方 	 発問の工夫	 まとめのさせ方

【ワークショップ型授業研究（SWOT分析法）】

	教師自身にかかわること		子どもに関わること	
強み	 導入の工夫		 学習意欲	
弱み	 発問・指示	 	 適用の場	 比較検討の仕方

そのほかKJ法、マトリックス法、短冊方式等があります。授業の目指すもの、観点等に応じて研究協議の方法の工夫が必要になります。

『おわりに』

このパンフレットをまとめるにあたり、尼崎市立小学校、松江市教育委員会、小野市教育委員会、朝来市SSE研究会、松江市立小学校、福岡市立小学校、神戸市立小学校の先生方にご協力いただきましたことを感謝いたします。また、事例2～4は東京都立港特別支援学校 川上康則先生の許可を得て、事例を掲載させていただきました。

文責：関西国際大学 教育学部 中尾繁樹

参考引用
文献

- 通常の学級における特別支援教育 ～小学校・中学校編～ （鳥取県教育委員会 平成23年度）
- 授業のユニバーサルデザイン Vol.2 （授業のユニバーサルデザイン研究会編著 平成21年度）



関西国際大学

平成23年度 独立行政法人教員研修センター選定 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

「特別支援教育の考えを取り入れた現場往還型研修による授業力向上プログラム」

— KUIS (Kansai University of International Studies) 発 みんなの特別支援教育 —

連携教育委員会：兵庫県尼崎市教育委員会

発行日：2012年3月31日

編集・発行：関西国際大学（尼崎キャンパス） 〒661-0976 兵庫県尼崎市潮江1丁目3番23号 TEL.06-6496-4128 FAX.06-6496-4321